

ふるさとが大好き！
そう言える子どもたちを
育んでいきたい

演出家であり、鹿屋市文化会館館長でもある松永太郎さんは、筑波大学や同大学院で野外教育活動を学び、沖縄へ移住。ふるさとを離れて沖縄の伝統芸能や舞台と出会ったことで、高校生までは「何もない」と思っていた鹿児島や自分自身のことを俯瞰で見られるようになったという。6年前に鹿児島へ戻ってからは、子どもたちふるさとを好きになつてほしいと、地元の歴史や文化をテーマにした演劇やミュージカルを創作。今では大人や地域を巻き込んだプロジェクトへと成長している。松永さんにこれまでの活動やこれからの夢について話を伺った。

鹿屋市文化会館館長・演出家

まつなが たろう
松永 太郎さん

Taro Matsunaga

演出家を目指した

きっかけは何ですか

大学や大学院の実習で何度も訪れた沖縄で、沖縄独自の文化に出会ったことですね。沖縄では、ウチナーグチ(沖縄方言)、独特な節回しの唄や踊りといった伝統芸能が、人々の暮らしにとっても密着していたんです。そのことに強く心を引かれて、大学院修了後に移住しました。

アルバイトをしながら伝統芸能の舞台にボランティアスタッフとして携わるようになり、次第に音楽や演出も手掛けるようになりました。その中で特に、素材を組み合わせて感動を作り上げていく演出という仕事にクリエイティブな楽しさを感じたんですね。そこではつきりと演出家としての道を歩んでいくと決意し、さまざまな舞台の現場でスタッフとして働きながら演出を学んでいきました。

そこで実感したのは、沖縄の人たちが自分たちの文化に愛情と誇りを持って



沖縄の伝統的な漁船「サバニ」に乗る松永さん(左端)。手にしているのは、沖縄伝統の楽器である三線(さんしん)。

いるということ。何をしても「沖縄大好き！」の気持ちが続いてくるんです。沖縄の子どもたちが唄や踊りを通じて地元愛を深めていく姿を見て、鹿児島の子どもたちにも地元の伝統芸能に触れ、もつと鹿児島を好きになってほしいという思いが次第に強くなってきました。

鹿児島に戻られてからの活動を教えてください

鹿児島をテーマにした高校生ミュージカルという構想を沖縄に住んでいた頃から考えていて、6年前に鹿児島に戻ってからすぐに鹿屋市の市民交流センターに企画提案しました。2回目の提案で採用していただいたのですが、初公演までに残されていた期間はわずか半年。最初に募集して集まった高校生はたったの6人と、なかなか厳しいスタートでした。

しかし、地域の多くの皆さんに協力していただき、平成20年2月、県内初の高校生ミュージカル「ヒメとヒコ」の公演は無事に成功。その後も毎年公演を行い、おかげさまで来年2月に6年目を迎えます。一貫して私が演出・脚本・音楽を手掛けているのですが、毎年キャストは替わりますし、演出や音楽も変化します。昨年は鹿屋市で発掘された古墳時代の象嵌装大刀のエピソードを加えました。

そのほか、沖永良部島知名町の町民

ミュージカル「えらぶ百物語」など地域を題材にした作品を手掛けたり、コンサートやイベントの演出もしています。

また、昨年4月からは鹿屋市文化会館館長を務めています。館長としての業務はもちろん、大学時代に学んだ野外教育活動の知識を生かし、ミュージカルに参加する高校生たちに自然の中で行う合宿キャンプなども体験させています。

高校生ミュージカルの演出を始めて変化はありましたか

高校生は大人を見る目がとてもシビア。相手の本気度や信頼できるかどうかを鋭く見えています。私は常に、高校生たちの信頼に応えられているか、憧れるような存在にいるかということ意識しています。高校生ミュージカルを始めたからこそ、より強く自分自身が成長し続けたと思えるようになりました。

そして何より、地元で暮らし、活動するようになって、以前は「何も無い」と思っていたふるさとが大好きになりました。「ヒメとヒコ」で1500年前の大隅と奄美の交流を脚本のテーマにしたのも、高校生や子どもたちにふるさとの文化や歴史を知ってもらいたい、ふるさとを好きになってほしいと思ったからです。そういう思いを込めてエンディングは、「大隅大好き！」というセリフにしています。これは演出家の特権ですね(笑)。

今後の抱負を聞かせてください

来年は文化会館以外でも公演できる小演劇作品を作り、県内各地の施設や学校などを巡回する構想を持っています。来てもらうだけでなく、私自身も積極的に出掛けていきたいですね。

舞台づくりは、人づくりや町づくりにつながります。たとえふるさとを離れたとしても、「いつかは帰りたい。ふるさとで働きたい」と思えるさまざまな環境を用意することも、鹿児島で暮らす私たちの務めではないでしょうか。

平成27年には「第30回国民文化祭」が鹿児島で開催されます。文化を通じて、鹿児島の人たちがふるさとの良さやここに生まれた意味を見つめなおす機会になることを願っています。



「ヒメとヒコ」の練習風景。キャストの高校生から見た松永さん評は「面白いところと厳しいところが半分ずつ」だそうです。